



# kubotatu

look for the 21st century hero  
on the Rally Raid MONGOL 1999

くぼたつ世界冒険録～モンゴル編 ————— 4



## 世紀のヒーローを求めて

協力：SSER ORGANISATION、NIFTY SERVE

### くぼたつの新刊がインプレスより発売!

アイデア発想から企画書制作まで、インターネットを活用しながらビジョンを具体的なビジネスプランへと高速に練り上げていく技術を解説した新時代の企画バイブル。

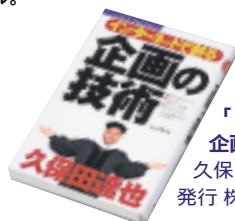
9月30日発売

オンライン購入は

 [www.ips.co.jp](http://www.ips.co.jp)

くぼたつはこんなことをしています

 [www.kubotatu.com](http://www.kubotatu.com)



「インターネットで創る  
企画の技術」  
久保田達也著  
発行 株式会社インプレス

バイクでのアメリカ横断を無事に成功させたくぼたつが次に挑んだ冒険は、「ゴビ砂漠」での生活だった。「ラリーレイドモンゴル」の観戦ツアーに参加し、モンゴルの遊牧民と生活をともにしたくぼたつが砂漠で



## 「音のない砂漠で夕日のヒーリング」 the setting sun heals us on the soundless dune

モンゴルってところは我々の体にあってるんじゃないかと思うよ。同行した日本人医師の織間さんと、最近では精神的に病んでる人が多いって話したんだけど。きっと、モンゴルに行ったら一発で治るね。いっそのことモンゴルの中にカウンセリングセンターみたいなものを作っちゃえばいいんだよ。1か月くらいいればみんなもとに戻ると思うな。元気になって日本に帰ってくる。そして、またあそこに行けるんだと思うだけで、そんなにストレスを感じなくなるんじゃないかな。

モンゴルから帰る飛行機のなかで新聞を読んでたら、すごくショックなことが書いてあった。最近、飛び込み自殺が多くて通勤電車がよく止まるでしょ。それは知ってたんだけど、新聞のコメントに「どうせくたばるならほかでやってくれよ」と書いてあった。これ、ヤバイよね。モンゴルに住んでる人からしてみればとんでもない話じゃない。通勤電車で飛び込む人なんてモンゴ

ルにいないからね。まずそれが異常だ。もう一つは、ほかでやってくれって言うような人間になっちゃったこと。それが恐ろしいね。そういう国にオレはいるのかって思ったよ。

どっかで歯車狂ってるんじゃないかな。そういう人たちに言いたいのが、「どこでもいいからなるべく海外、それも大都市じゃないところを旅しなさい」とのこと。旅に出れば悩んでることなんて消えちゃうと思うけど、「旅なんてしてる場合じゃない」と言うだろうけど、意外と岡目八目みたいなもので、ちょっと違う視点から見れば突破口が見つかるんじゃないかな。

地平線が広がるモンゴルで夕方の5時ぐらいから折り畳みイスに座って、ぼーっと日が沈むのを見てたら、悩みなんか全部消えちゃうんじゃないかな。夜も寒くないから、星を見ながら寝ちゃう。昼はモンゴルの大草原で昼寝。あとね、砂漠で立ちションが最高。昼寝と立ちションで、カウンセラーなんかいらな

いって本当にそう思うよ。

モンゴルである田舎の町に着いてヘリの補給してた。ふと気が付くと、とにかく音がない。車の音とか、工場の音とか、電車の音とかがないわけ。風の音しかしない。織間医師も、自分の患者をここに連れてきたいって言ってた。

あとね、モンゴルには肥満がない。心臓病もゼロだって。先天性な心臓病ってのはもちろんあるんだけど、ストレスからくる後天的な心臓病はまったくない。向こうにいるととにかく新陳代謝が激しくなる。高度が高くて乾燥しきってるから、毛穴の呼吸が楽になる。それから血糖値が上がるんで、体を巡る酸素が増えて燃焼率が高くなるんだね。だから、モンゴル行だけでダイエットもできちゃう。若い人なんてみんな引き締まった体してるよね。それに比べて日本でさ、やれダイエット食品だとかさ、稼いだ金そこに使うでしょ。なんかおかしいよね。モンゴル行くと、「羊一頭ちょうだい」とか言うとか丸焼きにして食わしてくれ。すっごく安く栄養価も高い。何日間も保存できるように薫製にしてくれたりするんだけど、日本だとこれがコンビニでしょ。

そういえばね、アメリカではレトルト食品を食うやつは少ないんだって。学生とかはお金がなくてファーストフードに行くけど、基本的にオレが会った中産階級以上の人たちは絶対にそんなもの食べない。日本なんか規制が甘いから、もう広告の



同行した織間医師（上）  
森林のトレッキングはすべてを癒す（下）

しっぱなし。みんなテレビで育てるから、テレビ見て、ファーストフード食べてればいいやってなっちゃう。ああなんと、ホルモンのバランスが崩れるとか、精子が減ってくるとかあたりまえだよ。アメリカとモンゴルと日本を比較してみると、日本だけばか見てるって感じだね。そろそろ、資本主義っていうかテレビコマーシャルで嘘八百並べて大衆が一斉にそこに走るっていう時代の終焉じゃねえかって。3か国回って帰ってきてみたらそんな気がするよ。



## 「草原と砂漠と歴史の道 “ラリーレイドモンゴル”」 on the road of meadow, dune and history

見たものとはなにか。ヒーリング、遊牧民、競争のない世界、そこには、アメリカとはひと味違う21世紀のヒントが隠されていた。

SSER ORGANISATIONが主催する「ラリーレイドモンゴル」は、世界的でも有名なラリーの1つだ。今年のレースは5回目を記念して「デューンプロジェクト」と銘打たれた。デューン、すなわちゴビ砂漠

が99年の舞台。世界中の強者たちが勝者に贈られる「モエ」のシャパンを浴びるために約5000キロの

完走を目指す。モーターサイクルと4輪の各部門には、ガストン・ライエ、菅原義正、長谷見昌弘など、



世界レベルの有名選手をはじめ、数多くのチャレンジャーがエントリーした。

砂丘と輝く草原と歴史の道で、くぼたつの「コミュニケーション・アドベンチャー」が始まる。まずはラリー出発前の暁をご覧あれ。

「ラリーレイドモンゴル」関連URL

[www.1g.mesh.ne.jp/sser/](http://www.1g.mesh.ne.jp/sser/)

[www.nifty.ne.jp/forum/fmcrace/mongol99/](http://www.nifty.ne.jp/forum/fmcrace/mongol99/)

[biz.nifty.ne.jp/usabike/mongol99/](http://biz.nifty.ne.jp/usabike/mongol99/)



パラグライダーもこなすヘリの熟年パイロット(左)と  
卓越したモンゴルの少年(右)

## 「モンゴルの卓越した貴族たち」 excellent nobles fly to the Mongolian sky

「裕福な生活ってなんだ」って、ラリーに参加した人たちと一緒にテントの中でよく話してたのよ。ある日、砂漠の中でみんなは車とかバイクとかをチェックしてたのね。オレはそこでぼーっとして食事してた。そして、同行したヘリのパイロットと地元の人が布団みたいなものを担いで小高い丘にどんどん登っていくのよ。「なんだあいつら」って言ってたら、真下に大砂漠が見渡せるくらい上の方まで行くわけ。そこでなにやったかっていうと、パラグライダーで飛んで行ったんだよ。唖然と

したね、本当に。それも気持ちよさそうにさ、何分も何分も飛んでるわけ。大草原から砂漠までずーとなめて悠々快適に飛んで、ヘリのあるところへボンと降りる。オレたちは口をばかんと開けてさ、「あれって貴族だよ」ってつぶやいてた。フランスの貴族や大金持ちもヘリでキャンプに行っパラグライダーとかパラセーリングだとか水上スキーだとかやるらしいんだけど、モンゴルの人ってそれをやってるんだよ。我々の送り迎えもしてあって、その合間に好き勝手にパラグライダ

ーやってるでしょ。そのパイロットのおじいさんがまたおもしろい人で、もう熟練なのね。いつもへんなぼろぼろの帽子かぶって、時代遅れのサングラスして、毎日同じポロシャツ着てんだよ。ある日、そのおじいさんに誘われて一緒に飲んだ。そしたら、モンゴルに有名な強いウォッカがあるんだけど、それをオレのグラスに注ぐ手が震えてんの。アル中の飲み過ぎ。そのおっさんがパラグライダーとかやっちゃうんだからね。「酒と空を飛ぶ世界さえありゃあいいんだよ」

って言うのね。かっこいいよね。「金なんか貯めなくてできるから、おまえもやれ」って話をした。パラグライダーが優雅に飛んでるのを見てふと気づいたら、その小高い丘の上にヤクを運んだ少年があぐらかいてるんだよ。見るからに哲学者みたいでかっこよかったなあ。パラグライダーにもヘリにも驚いてる様子はないし、バイクとか車とかが猛烈なスピードで走ってるのに、なんとも思っていないみたいなの。どちらかっていうと、「なんであんならそんなことやってんの」みたいな感じだね。やっぱね、彼の方がよっぽど生きる楽しみに卓越してるかもしれない。毎日同じように牛を連れて、夕方になると帰ってくる。誰かと競争するわけでもなく、なんか哲学してんだよね、物質文化と資本主義とかが入ってきてない世界っていうのは、なんて優雅なのかって思ったわけ。

博物館に行ってみて、ジンギス・カンがなゼイタリアまで攻めて行けたかっていうのがわかった。彼らはね、ゲルを馬で引いて敵地まで行っちゃうんだよ。兵隊が家族ごと連れて行っちゃう。もともとジンギス・カンの軍は圧倒的に強いからね。鉄の鎧とか、青龍刀っていう刃の化け物みたいなものを持って、怪力どもがそれを振り回すから勝てるわけない。追い込まれた敵はみんな城に立てこもるじゃない、そうすると、ゲルでまわりを包囲しちゃうのよ。で、馬はまわりに生えてる草食べて、自分たちは悠々自適に羊のバーベキューがなんか食べて、相手がギブアップするのを待つ。だから、ほとんど戦わずして攻め込めたのね。さらに、ジンギス・カンがユーラシア大陸をほとんど押さえられたっていうのは、ある場所を占領したらその都度そこに何人かの部下を住まわしちゃったからなんだって。そ

うやってどんどん拡大していけば、食料の補給路もいらなくなるから全面展開できる。情報網もしっかり作ってあって、50キロおきに変え馬を用意しておいて、伝令がジンギスカンと首都を行き来してたそうだよ。いまのインターネットだな。ほかのどの軍隊よりもコミュニケーションできていたわけだ。頭も良かったんだよ。実際に彼らと話してみると本当に頭がいいのがわかるけどね。一説によると、モンゴルは500年単位ででかくなったり小さくなったりしてるらしい。それが正しければ、もう一度モンゴルがユーラシア大陸に君臨する時代が近いんだって。まんざら嘘でもないなって思うのは、ジンギス・カンの頃から彼らは100年単位でものを考えていたらしいのね。領土を広げながら若い連中が大移動していくでしょ。そうすると、着いた村の娘といい仲になっちゃう。当然、若い兵士はずっとその村にい

たくなるじゃない。それをね、許しちゃうんだって。許すことで子孫をいろんな地域に分散する。モンゴル人として鍛え上げられた若者たちが、違う民族とどんどん混ざり合っていく。最後にイタリアまで攻めて戻ってきたころには、各地に置いてきたモンゴルの青年とその子供たちは立派なモンゴリアンになってる。気が付けば、実はユーラシア大陸全体がモンゴルになってたってこと。すごい戦略をたてたもんだよね。その影響は今でも残ってて、ウランバートルみたいな町に行くのと住んでるのはクォーターかハーフが多いもんね。彼らの中にはそういう意識が残ってるんだよ。たとえば日本が経済大国になったとか、アメリカが世界のインシアチブをとったとかいってもこの100年や200年じゃない。そんなものは風前の灯火。一時的なものでしかないっていう意識だよ。やっぱリスケールでかいな、あの人たちは、



モンゴル戦士のようにゴートの角を付けて(上)  
ジンギス・カンの子孫は美少女となった(下)

## 「500年の計画が21世紀に君臨する」 the strategy of 500 years will rule the world



## 「1日1回空を眺めなさい」 “when you are in trouble, look at the sky”

日本の空もモンゴルと同じ



モンゴルに行って帰ってきたら、なんの違和感もなくすぐに日本の生活に戻れるのね。「あれ、慣れたのかな」と思うじゃん。あのモンゴルのすばらしい景色を見ないで、なんでこんなコンクリートばかりのと

ころにいられるんだらうと思う瞬間に見てるのは「空」だね。空を眺めてる。モンゴルの暮らして遠いところを見ている生活なんだね。空を見てるとこれがまたおもしろいんだよ。癒されるね。忙しくてどこにも行けないやつへのお薦めは、「空を毎日見てろ」ってことかもしれな

い。空はいつでもどこかにあるじゃない。都会には地平線とか草原とか海はないけど、空はある。だったら空を見ればいいんじゃないかと思った。1日1回でいいから空を見る。1回も空を見ないでもう何年も経ってるって人いるんじゃないかな。特に出版系の人ね。

## 「デジタル遊牧民の時代がやってくる」 here comes the generation of digital nomads!

モンゴルラリーの出場者に北海道で二フティのシスオベやってる恒川さんがいて、よく一緒に話をしていた。結局、彼は完走したんだけど、走り終わったときになんて言ったかっていうと、「いやあ、みんな速いんだもん」だって。それを聞いてたSSER主催者の山田さんが「だってこれレースだよ」って言った。レースに出ている人にも、勝つために出ている人と、とにかくモンゴルを走りたくて来ている人の2種類がいるんだ。キャンプも食事も機材の運搬もしてくれるから願ってもないチャンスってわけさ。観光じゃ決して来られない大原野まで分け入って行くんだからね。

そんな話を聞いててふと思ったんだけど、今まで、現実の社会は競争ばかりだったじゃない。競争して、切磋琢磨して勝つやつがいる。そりゃあいいことなんだろうけど、なんか「それで？」って感じなんだよね。やたらと競争して、金もつき込んで、そのために組織も作って必死に競争する時代っていうのは、そろそろ終焉に向かってるんじゃないかな。競争が見直されるっていうか、果たしてそれ自体に意味があるのかっていうところまできてる。企業でも今までは社長になるために社員同士が競争してたじゃない。でも、競争がなければみんないい仕事すると思うんだよね。足の引張り合いとかがなくなるでしょ。競争のない社会っていうのが21世紀にはもう一度見直されてみんな自分を

取り戻し始めるんじゃないかな。

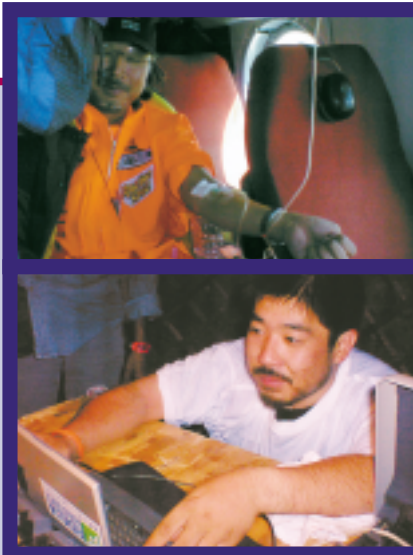
じゃあ、次はどんな世界かって言うと、「遊牧民」の時代じゃないかと思う。バンバン海外に出てって、向こうで生活するとか、仕事するとかってのがあたりまえになってくる。遊牧民にはお金儲けも競争も不動産も意味がない。もともと我々も騎馬民族で遊牧民だったから、そのことは遺伝子が記憶してるんじゃないかな。モンゴルに行く、オレだけじゃなくてみんなびたっと向こうの生活にはまっちゃう。それは、古巣へ戻ったってことを遺伝子が覚えてるからじゃないかな。

とにかく、1つのところにずっといるんじゃないかってアメリカでもモンゴルでも好きなときに行きたいところに行ける、そういう生き方が一番いいと思うよ。モンゴルの砂漠の上でぼっとしててもいいし、アメリカのキャニオンに行って夕日を見ててもいい。とにかく、「行きたくなったらそこに行く」という環境を持つてるやつが一番おもしろいだろうな。働き方のパターンをある程度自分でコントロールできる生き方、これからそういうスタイルに入ってる

くんじゃないかと思うね。

「そうは言っても金ないから行けない」っていうよね。でもさ、高級ホテルに泊まって土産物をいっぱい買ってのをやめちゃえば、全然お金かかんないんだよ。金がないから行けないっていうのは嘘で、実際にお金なくても旅はできるってことを知りさえすればいいわけ。ホームページ開いてモンゴルの人と交信できちゃえば、向こう行ってタダで泊めてもらうこともできる。アメリカンディアンだってウエルカムだったよ。実はそういうことができる環境に日本人はいるんじゃないかと思うけど、どうせ不景気なんだし、リストラ就職難だって言うんなら、今のうちにバンバン海外に出てみればいい。お金がなくてもいられるってことを知れば、「仕事、仕事、金、金」とか言わずにすむんじゃないかな。

あとね、モンゴルの大草原の真ん中に座って、インマルサット立ち上げてノートパソコンでメールを受信したんだけど、あれは気持ちいい時間帯だったね。文明ってすげえなって思ったよ。だって、インマルサットのアンテナを通して衛星経由



SSERの山田氏(上)  
インマルサットでホームページを  
更新する恒川氏(下)

でみんなとつながってるわけでしょう。パソコンにどんどんデータが入ってくるのを見てると、昔の言葉でいう「ミュータント」みたいなものを感じたね。能力からすれば本当に超能力だと思う。砂漠で撮った写真をその場でホームページにアップするわけさ。東京で同じことやっててもあんな感じしないよね。だけど、大砂漠とか大草原のまっただ中で、1人ぼつんとアタッシュケース1個でみんなとコミュニケーションがとれる。これはすごいな。ひょっとすると、そのまま「デジタル遊牧民」になれるんじゃないかな。電源さえあれば、世界中どこ行ってもつなげられる。ソーラーパネルを持ってれば電源なくてもやっていける。パソコンとインマルサットとソーラーパネルを抱えて旅をするのもおもしろいかもね。そんなので世界を一周回ってみてえな。



ゲルに済む遊牧民たち



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)